

良寛 全句集 The Complete Haiku by Ryōkan for Japanese Classical Literature at Bedtime

#	season	original	kana
1	新年	のっぺりと師走も知らず今朝の春	のっぺりと しわすもしらず けさのはる
2	新年	よそはでも顔は白いぞ嫁が君	よそわでも かおはしろいぞ よめがきみ
3	新年	春雨や門松のゆりみけり	はるさめや かどまつのしめ ゆりみけり
4	春	春雨や静になづる破れふくべ	はるさめや しずかになづる やれふくべ
5	春	春雨や友を訪ぬる想ひあり	はるさめや ともをたずぬる おもひあり
6	春	水の面にあや織りみだる春の雨	みずのみに あやおりみだる はるのあめ
7	春	いでわれも今日はまぢらむ春の山	いでわれも きょうはまじらん はるのやま
8	春	新池や蛙とびこむ音もなし	あらいけや かわずとびこむ おともなし
9	春	夢覚めて聞けば蛙の遠音哉	ゆめさめて きけばかわずの とおねかな
10	春	山里は蛙の声となりにけり	ゆめざとは かわずのこえと なりにけり
11	春	今日来ずば明日は散りなむ梅の花	きょうこずば あすはちりなん うめのはな
12	春	青みたるなかに辛夷の花ざかり	あおみたる なかにこぶしの はなざかり
13	春	雪しろのかかる芝生のつくづくし	ゆきしろの かかるしばふの つくづくし
14	春	雪しろの寄する古野のつくづくし	ゆきしろの よするふるやの つくづくし
15	春	雪汁や古野にかかるづくづくし	ゆきしるや ふるやにかかる つくづくし
16	春	鶯に夢さまされし朝げかな	うぐいすに ゆめさまされし あさげかな
17	春	鶯や百人ながら気がつかず	うぐいすや ひやくにんながら きがつかず
18	春	梅が香の朝日に匂へ夕桜	うめがかの あさひににおえ ゆうざくら
19	春	世の中は桜の花になりにけり	よのなかは さくらははなに なりにけり
20	春	山は花酒屋酒屋の杉ばやし	やまははな さかやさかやの すぎばやし
21	春	同じくば花の下にて一とよ寝む	おなじくば はなのもとにて ひとよねん
22	春	須磨寺の昔を問へば山桜	すまでらの むかしをとへば やまざくら
23	春	この宮や辛夷の花に散る桜	このみやや こぶしのはなに ちるさくら
24	春	散桜残る桜も散る桜	ちるさくら のこるさくらも ちるさくら
25	夏	誰れ聞けと真菰が原のぎやぎやし	たれきけと まこもがはらの ぎょうぎょうし
26	夏	真昼中真菰が原のぎやぎやし	まひるなか まこもがはらの ぎょうぎょうし
27	夏	人の皆ねぶたき時のぎやうぎやうし	ひとのみな ねぶたきときの ぎょうぎょうし
28	夏	かきつばた我れこの亭に酔ひにけり	かきつばた われこのていに よいにけり
29	夏	真昼中ほろりほろりと芥子の花	まひるなか ほろりほろりと けしのはな
30	夏	鍋磨く音にまぎるる雨蛙	なべみがく おとにまぎるる あまがえる
31	夏	夏の夜やのみを数へて明かしけり	なつよや のみをかぞえて あかしけり
32	夏	風鈴や竹を去事三四尺	ふうれいや たけをさること さんししゃく
33	夏	涼しさを忘れまひぞや今年竹	すずしさを わすれまいぞや ことしだけ
34	夏	鳩の巣のところがへする五月雨	におのすの ところがえする さつきあめ
35	夏	さわぐ子の捕る知恵はなし初ほたる	さわぐこの とるちえはなし はつほたる
36	夏	青嵐吸物は白牡丹	あおあらし すいものは はくぼうたん
37	夏	凌霄花に小鳥のとまる門垣に	のうぜんかに ことりのとまる かどがきに
38	夏	酔臥の宿はここか蓮の花	よいぶしの やどりはここか はすのはな
39	夏	わが宿へ連れて行きたし蓮に鳥	わがやどへ つれていきたし はすにとり
40	夏	雷をおそれぬ者はおろかなり	かみなりを おそれぬものは おろかなり
41	夏	鉄鉢に明日の米あり夕涼	てっぱつに あすのこめあり ゆうすずみ
42	夏	手もたゆくあふぐ扇の置きどころ	てもたゆく あおぐおうぎの おきどころ
43	夏	昼顔やどちらの露の情やら	ひるがおや どちらのつゆの なさけやら

#	season	original	kana
44	夏	留主の戸に独り淋しき散り松葉	るすのくに ひとりさみしき ちりまつば
45	秋	いざさらば暑さを忘れ盆踊	いざさらば あつさをわすれ ぼんおどり
46	秋	手ぬぐひで年をかくすやぼんをどり	てぬぐいで としをかくすや ぼんおどり
47	秋	萩すすき露のぼるまで眺めばや	はぎすすき つゆのぼるまで ながめばや
48	秋	萩すすきわが行道のしるべせよ	はぎすすき わがゆくみちの しるべせよ
49	秋	雨の日やむかしを語んやれふくべ	あめのひや むかしをかたらん やれふくべ
50	秋	顔回がうちものゆかし瓢哉	がんかいが うちものゆかし ふくべかな
51	秋	我が恋はふくべで泥鰌をおすごとし	わがこいは ふくべでどじょうを おすごとし
52	秋	秋風のさわぐ夕となりにけり	あきかぜの さわぐゆうべと なりにけり
53	秋	秋風に独り立たる姿かな	あきかぜに ひとりたちたる すがたかな
54	秋	摩頂して独り立ちけり秋の風	まちょうして ひとりたちけり あきのかぜ
55	秋	屋根引の金玉しぼむ秋の風	やねひきの きんたましぼむ あきのかぜ
56	秋	柿もぎの金玉寒し秋の風	かきもぎの きんたまさむし あきのかぜ
57	秋	秋高し木立は古りぬ籬かな	あきたかし こだちはふりぬ まがきかな
58	秋	秋は高し木立はふりぬこの館	あきたかし こだちはふりぬ このやかた
59	秋	二人して筆をとりあふ秋の宵	ふたりして ふでをとりあう あきのよい
60	秋	宵闇やせんざいはただ虫の声	よいやみや さんざいはただ むしのこえ
61	秋	稲舟をさし行方や三日の月	いなぶねを さしゆくかたや みかのつき
62	秋	名月や庭の芭蕉と背比べ	めいげつや にわのばしょうと せいくらべ
63	秋	名月や鶏頭花もによっきによき	めいげつや けいとうばなも によっきによき
64	秋	綿は白しこなたは赤し鶏頭花	めんはしろし こなたはあかし けいとうか
65	秋	秋日和千羽雀の羽音かな	あきびより せんばすずめの はおとかな
66	秋	手を振て泳いでゆくや鰯売り	てをふって およいでゆくや いわしうり
67	秋	いく群れか泳いで行や鰯売り	いくむれか およいでゆくや いわしうり
68	秋	息せきと升起て来るや鰯売り	いきせきと のぼりてくるや いわしうり
69	秋	蘇迷廬の訪れ告げよ夜の雁	そめいろの おとずれつげよ よるのかり
70	秋	われ喚て故郷へ行や夜の雁	われよびて こきょうへゆくや よるのかり
71	秋	君来ませいが栗落道よけて	きみきませ いがぐりおちし みちよけて
72	秋	盗人にとり残されし窓の月	ぬすびとに とりのこされり まどのつき
73	秋	つっくりと独立けり秋の庵	つっくりと ひとりたちけり あきのあん
74	秋	悠然と草の枕に秋の庵	ゆうぜんと くさのまくらに あきのあん
75	秋	紫の戸に露のたまりや今朝の秋	むらさきの とにつゆのたまりや けさのあき
76	秋	いくつれか鷺の飛びゆく秋の暮れ	いくつれか さぎのとびゆく あきのくれ
77	秋	いざさらば我も返らん秋の暮	いざさらば われもかえらん あきのくれ
78	秋	紅葉葉の錦の秋や唐衣	もみじばの にしきのあきや からごろも
79	秋	松黝く紅葉明るき夕べかな	まつくろく もみじあかるき ゆうべかな
80	秋	ゆく秋のあはれを誰に語らまし	ゆくあきの あわれをだれに かたらまし
81	冬	焚くほどは風がもて来る落ち葉かな	たくほどは かぜがもてくる おちばかな
82	冬	初時雨名もなき山のおもしろき	はつしぐれ なもなきやまの おもしろき
83	冬	柴焼て時雨聞夜となりにけり	しばたいて しぐれきくよと なりにけり
84	冬	日々日々に時雨の降ば人老ぬ	ひびひびに しぶれのふれば ひとおいぬ
85	冬	山しぐれ酒やの蔵に波深し	やましぐれ さかやのくらに なみふかし
86	冬	木枯を馬上ににらむ男かな	こがらしを ばじょうににらむ おとこかな
87	冬	冬川や峰より鷺のにらみけり	ふゆかわや みねよりわしの にらみけり

#	season	original	kana
88	冬	湯もらひに下駄音高き冬の月	ゆもらいに げたおとたかき ふゆのつき
89	冬	火もらひに橋越えて行さむさかな	ひもらいに はしこえてゆく さむさかな
90	冬	柴垣に小鳥集まる雪の朝	しばがきに ことりあつまる ゆきのあさ
91	冬	疑ふな六出の花も法の色	うたがうな むつでのはなも のりのいろ
92	冬	をぢが身は寒に埋雪の竹	おじがみは さむさにうずむ ゆきのたけ
93	冬	鉢叩き鉢叩き昔も今も鉢叩き	はちたたき はちたたきむかしもいまでも はちたたき
94	冬	人の来てまたも頭巾を脱がせけり	ひとのきて またもずきんを ぬがせけり
95	冬	のっぼりと師走も知らず弥彦山	のっぼりと しわすもしらず やひこやま
96	無季	よしや寝む須磨の浦わの波枕	よしやねん すまのうらわの なみまくら
97	無季	黄金もてきざ杖買はんさみつ坂	こがねもて いざつえかわん さみつざか
98	無季	つとにせむ吉野の里の花がたみ	つとにせん よしののさとの はながたみ
99	無季	落ちつけばここも廬山のよるの雨	おちつけば ここもろざんの よるのあめ
100	無季	平生の身持にほしや風呂上り	へいぜいの みもちにほしや ふるあがり
101	無季	この人の背中に踊りできるなり	このひとの せなかにおどり できるなり
102	無季	雨の降る日はあはれなり良寛坊	あめのふる ひはあわれなり りょうかんぼう
103	無季	うら畑殖生の垣の破れから	うらはたけ はにゆうのかきの やぶれから
104	無季	倒るれば倒るるままの庭の草	たおるれば たおるるままの にわのくさ
105	無季	幾重ある菩提の花を数へみよ	いくえある ぼだいはなを かぞえみよ
106	無季	可惜虚空に馬を放ちけり	おしむべき こくうにうまを はなちけり
107	無季	来ては打ち行きては叩く夜もすがら	きてはうち ゆきてはたたく よもすがら

<p>参考図書 reference book</p>	<p>校注 良寛全句集</p>	<p><a href="http://www.amazon.co.jp/校注-良寛全句集-谷川-敏朗/dp/439343434X/ref=sr_1_1?s=books&amp;ie=UTF8&amp;qid=1457233397&amp;sr=1-1&amp;keywords=9784393434345">http://www.amazon.co.jp/校注-良寛全句集-谷川-敏朗/dp/439343434X/ref=sr_1_1?s=books&amp;ie=UTF8&amp;qid=1457233397&amp;sr=1-1&amp;keywords=9784393434345</a></p>	<p><b>単行本:</b> 284ページ  <b>出版社:</b> 春秋社; 新装版 (2007/04)  <b>言語:</b> 日本語  <b>ISBN-10:</b> 439343434X  <b>ISBN-13:</b> 978-4393434345  <b>発売日:</b> 2007/04</p>	